

2019 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	丸岡 利則
最終学歴	学 位	専門分野
大阪府立大学大学院社会福祉学研究科修士課程修了	修士・ 社会福祉学	社会福祉学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

社会福祉教育は、建学の精神を踏まえながら、現代社会における社会福祉制度や社会保障制度に対する一定の批判とオルタナティブの可能性を考えることにある。社会福祉は、われわれの生活や人生と密接につながっており、それらの制度設計の変更も含めた将来像が常に問われていることを確認しなければならないからである。そのためには、豊かな人間性を涵養し、福祉分野等で即戦力として活躍しつつ福祉社会の創造的担い手となる専門職業人（オンリーワンの人材）の養成として、「健康づくり指導者コース」（1年生は地域防災コース）の一つの専門領域である「社会福祉」を伝授することを第一の目標とするものである。

(計画)

現代社会における問題（社会的孤立や社会的排除・葛藤などの生活不安や精神的不安定状態による社会関係の不備など）を的確に分析し、問題解決の方策を示していくため、「健康づくり指導者コース」（1年生は地域防災コース）における専門家養成をベースにした「社会福祉概論」をより充実したものにする。そのためには、社会福祉の相談援助に関する基礎知識と技術を教授し、福祉・医療現場で活用できる人材の養成にむけて、社会福祉の基本的学問を備え、理念と原則を根拠とした、社会福祉の専門的知識、また、高齢者や障害者に対する福祉サービスに関する専門的知識を教授する。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

人間学概論、社会保障論、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ

(後期)

社会福祉概論、人間と福祉、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ

○教育方法の実践

すべての講義科目は、毎回レジュメを配布した。同時に毎回講義内容のテーマを設定し、学習効果が上がるようミニ・レポートの提出を促した。各演習では、学生間のディスカッションを毎回実施して、主体性を引き出す学習ができるようにした。

○作成した教科書・教材

すべての講義科目の教材として教科書以外の参考文献の紹介を記載したレジュメを毎回配布した。各演習については、毎回、レジュメを作成し、資料とともに配布した。

○自己評価

講義科目では、テキストにはない独自のレジュメを配布した。これは、学生が書いて覚えるような形式で作成し、講義を聞きながら、空白を埋めることによって学習効果がもたらされるように

したので、おおむね目標が達成された。

II 研究活動

○研究課題

社会福祉学の原理研究のなかでも、特に社会福祉の学問論を扱う領域を中心に研究しているが、メタ・クリティークを根底においた「社会福祉学の知識」の確立を課題とする。

○目標・計画

(目標)

「社会福祉学の知識」に関する研究の目標は、社会福祉学の制度的な系譜学的分析として、1つは「制度」の由来や系譜を分析すること、2つは、学問をめぐる成立条件としての「知識の客観性」を探求することにおくものである。

(計画)

社会福祉の知識としての社会資源論とニーズ論の成果を踏まえ、対象論のクリティークを射程に入れて検討してきたが、今年は、社会福祉理論の系譜学的分析と学問の成立条件を総合し、理論モデルの作成にむけた研究を完成することにある。

○2012年4月から2020年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

(学術論文)

- ・丸岡利則「第7章 レジデンシャルケアのメタ・クリティーク—社会福祉学の知識IV—」、尚爾華ほか『高齢社会の健康と福祉のエッセンス』地域創造研究叢書 (No. 32) 2019年11月、頁数：59頁 (p 66-124)
- ・丸岡利則「社会福祉学の知識III—対象論のメタ・クリティーク」東邦学誌 (第47巻第2号) 2018年12月、頁数：21頁 (p 79-99)
- ・丸岡利則、丸岡桂子「スクールソーシャルワーク実践の可能性」東邦学誌 (第44巻第2号) 2015年12月、頁数：22頁 (p 69-90)
- ・丸岡利則「社会福祉学の知識—理論と現実の境界線」東邦学誌 (第44巻第1号) 2015年6月、頁数：14頁 (p 87-100)
- ・丸岡利則、丸岡桂子「児童施設ケアの再構成」東邦学誌 (第43巻第2号) 2014年12月、頁数：12頁 (p 39-50)
- ・丸岡利則「社会福祉学の知識」高知県立大学紀要 (社会福祉学部編) (第63巻) 2014年3月、頁数：20頁 (p 21-40)
- ・丸岡利則「社会福祉学と二元論」高知県立大学紀要 (社会福祉学部編) (第62巻) 2013年3月、頁数：16頁 (p 27-42)

(学会発表)

- ・なし

(特許)

- ・なし

(その他)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

- ・なし

○所属学会

日本社会福祉学会、大阪府立大学社会福祉学会

○自己評価

- ・研究活動は、社会福祉の学問的な理論についての論文発表のみであった。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

変化する社会ニーズと学部の教育理念および教育目的との整合性を常に検証し、学科会議等において、さらに整合性をめぐるより適切な学部運営のあり方について検討する。本学部および専攻の目的の適切性についての定期的な検証は、必要であり、その検証結果を個々の教員の教育目的にむすびつく取り組みとして、各学科・専攻で検証し設定した教育目標を達成するシステムの構築を検討する。

(計画)

学部長職として責務を果たし、さらに所属する委員会での積極的な取り組み、また大学の行事などでの学生への教育に貢献する。また、2019年度から始まるコース教育の運営に関して、教育と資格と就職を結びつける方法を探求する。

○学内委員等

教学法人協議会構成員、高大連携会議構成員、大学再編準備室会議構成員、運営委員会委員、学長会議構成員、教育力向上委員会委員、人事委員会委員、学生募集戦略委員会委員、全学教職課程委員会委員、中高教職課程委員会委員長、教職課程再課程認定委員会委員

○自己評価

学部長を引きうけて2年目になり、同時に多くの委員会に所属し、学部運営業務全般、委員会活動に専念した。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

本学の理念である建学の精神や校訓、オンリーワンのコンセプト、さらに教職員の心構えのような目的達成には、多様化する学生の質と社会ニーズに相応した教育実践が必要といえる。今後ますます進展する少子社会は大学のあり方そのものにも影響すると推測される。そうした影響を直接受ける地方の私立大学においては、社会貢献、とりわけ地域貢献は、大学の存亡にもかかわる重大な社会要因でもある。その中であって、社会から期待される大学として存在するためには、大学構成員が建学の理念がもつ精神を理解し共有するとともに、その具現化に向けた地域貢献への教育目的の適切性と実践活動を広く社会へ公表することが重要である。そのために、地域福祉実践や地域のボランティア活動において、社会ニーズの分析とともに、本学の理念および目的との整合性について継続的に検討する必要がある。

(計画)

現在では関西地区での精神障害者の作業所の運営にボランティア活動をしているが、今後は名古屋、名東区などの地域の行事や諸活動に参加し、地域福祉活動での実践的役割を果たしたい。

○学会活動等

当該年度は、これまで長年続けて来た愛知東邦大学、広島国際大学、神戸女学院大学などの合同の「ソーシャルケア学会」の運営活動が中止したので、特に学会としての活動はない。

○地域連携・社会貢献等

地域福祉実践や地域のボランティア活動に継続的に参画した。

○自己評価

社会貢献については、社会福祉法人である精神障害者の団体の運営（監事）と理事会参加が中心で、それが自己研さんにつながった。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自己研鑽については、研究と研究方法や実質的な内容を結びつける研究会や学会への参加への積極的な取り組みが必要であったが、「ソーシャルケア研究会」が中止となり、特に活動はない。

VI 総括

大学は、教育と研究と学内運営、地域貢献、学生のニーズ対応、国際貢献など教員の役割機能はさらに増えてきている。とりわけ大学運営上の役割では、人間健康学部の学部長を引き受けて2年目に入り、人間健康学部の「独自性」を発揮した。それは、すべての運営上のマターに関し、「万機公論に決すべし」という精神のもと、教員間の意見を取り入れて、それをビジョンに反映させることを目指したことである。ただし、独自性にも限界があり、それがこれからの課題である。

以 上